

## 小督像の造型

——諸本比較を通して——

郭 順 伊

### はじめに

『平家物語』における小督説話は全くの架空の物語ではない。小督が実在した女房であり、『平家物語』が記すように、高倉院との間に女兒をもうけた女性であることは、多くの史料によって証明され、その中には小督の晩年を知る手がかりとなるものもある。<sup>(1)</sup> 小督説話の概要は周知の通り、独裁的な清盛の圧力によって、別離した小督と高倉院の悲恋の物語である。高倉院の中宮徳子と、さらに高倉院に仕える以前に小督が恋仲であった隆房も、清盛の娘婿であることから清盛の逆鱗に触れ、その事を知った小督は自ら宮中を出奔する。その後、高倉院の命によって仲国に見つけ出され、再び宮中に召し帰された後一女をもうけた小督であつたが、その事実を聞きつけた清盛は小督を尼になし追放、それが原因となり高倉院は崩御するに至つたのである。小督の追放に留まらず、高倉院の崩御まで引き起こした権力者清盛の横暴と、悲恋に破れた薄幸の小督と高倉院の恋愛、この二つが小督説話の主題と捉える事が出来る。

また、『平家物語』諸本間における小督説話収載位置の相違から、中西美智子氏は屋代本における小督物語を古態と考へておられる。小督説話は、覚一本では巻第六「新院崩御」、「紅葉」、「葵前」、「小督」と、高倉院追悼逸話の最

終章に位置しているが、一方屋代本では卷第三「同内府病惱事同死去事」に続いて「小督局事」を収載し、その冒頭は以下の通りである。

小松殿薨セラレテ後ハ、様々人ノ心モ替リ、不思議ノ事共多カリケリ。其比中宮ノ御方ニ、小督殿トテ勝レタル美人、箒ノ上手候ハレケリ。主上夜々召レケリ。是ハ桜町中納言成憲卿ノ娘ナリ。 (屋代本卷第三「小督局事」)

「人ノ心」とは、清盛の心のことである。感情的で身勝手な振る舞いの清盛に対し、謹直で温厚な忠義ある理想的人物として描かれた実質的な平家の棟梁重盛の死は、同時に清盛の悪逆を止める人物がいなくなった事を意味する。屋代本は重盛の死を記す「同内府病惱事同死去事」に次いで清盛横暴譚の一挿話として小督説話を配置し、重盛死後、清盛の乱暴な振る舞いを語る章段として、小督説話を用意しているのである。

さて、屋代本小督説話の収載位置を古態と考えるならば、前述したように、諸本間に確認出来る小督説話の位置について、屋代本と異なる覚一本の配置は、作者の何らかの意図があつて収載箇所を移動させたと考えられる。堀竹忠晃氏は、覚一本における小督説話を含めた高倉院逸話の「紅葉」、「葵前」、「小督」について以下のように述べておられる<sup>3</sup>。

「小督」は、「紅葉」や「葵前」とは、章段の趣を異にしており、高倉院に関する説話ではあるが、高倉天皇の悲恋をテーマにしている。テーマの異なる「小督」が、卷六の位置に収載されたのは、高倉院の死を語るに当つて、高倉院に関する説話を一連の関連説話として、一同にまとめて編纂したことによるものである。

「紅葉」、「葵前」にあたる章段を、屋代本は小督説話の卷第三より後の、卷第六に「高倉院御在位之間事同崩御事付葵女御事」として設けており、本来、重盛死後の清盛悪行譚として存在する小督説話を、覚一本作者が高倉院崩御を語る追悼逸話にまとめたものと考えられる。そして、屋代本小督説話と配置を異にする覚一本と同様の形式で、高倉

院追悼逸話の最終章として小督説話を設ける諸本に、延慶本、長門本がある。小督の物語を設けるこの三本の諸本は、小督説話収載位置の形式こそ同一であるが、その内容、特に人物像の造型においては各々に相違が見られ、登場人物の性格設定が一致していないように思える。それぞれ諸本全体の特徴という事は、もちろん考慮すべきであるが、本稿では覚一本、延慶本、長門本の小督説話に注目し、物語の主要である小督の人物像がどのように描かれ、また設定されているのか、小督自身の語り、または心中描写を通してそれぞれの考察を行いたいと思う。

## (一)

渥美かをる氏は、覚一本における小督説話について、「矢張り筋を追うことが骨子とされていて、小督の苦悩は書かれていない。雰囲気描が描かれているだけである。」と述べられ、また、池田誠氏は覚一本における作中人物の心中思惟の考察において、「『小督』の章段では、小督は客体としてとらえられ、隆房・仲国という二人の男の立場を通して描かれていくのである。」と、小督の心中思惟表現が少ないことを指摘されている。<sup>⑤</sup>池田誠氏が論及されるように、覚一本の小督は心中描写が乏しく、また小督自身の口を通して胸中を語る際も、多くの思いを吐露しない印象がある。それは小督の意思表示の少なさにも関係し、覚一本における小督の性格を知る手がかりになり得ると考えられる。そして延慶本、長門本も同様に小督の心中の語り、その言動を確認する事で、それぞれの小督説話における小督像の特徴が明確になってくるのではないだろうか。そこで、覚一本、延慶本、長門本における小督の態度、心中告白が記される四箇所を、その言動に注目し取り上げて考察をしていきたい。四箇所の場面は以下の通りである。

(A) 高倉院に仕える以前、恋人関係であった隆房に対する小督の態度。

(B) 高倉院と小督の關係に激怒する清盛に怯え、小督が宮中を出奔し行方をくらます。

(C) 高倉院の命により、嵯峨野に隠れ住む小督を捜し出した仲国に対して小督が語る。

(D) 宮中に戻った小督の元へ清盛が押しかけ、小督を尼になし追放する。

まず(A)は、高倉院に召された小督が、恋人であつた隆房を振り切る場面である。覺一本で(A)に該当する箇所には以下の二つの記述がある。

・小督殿、「われ君に召されんうへは、少将いかにいふとも、詞をもかはし、文を見るべきにもあらず」とて、つてのなさをだにもかけられず。

(覺一本卷第六「小督」)

・小督殿、やがて返事もせばやと思はれけれども、君の御ため御うしろめたうや思はれけん、手にだにとつても見たまはず。上童にとらせて坪のうちへぞなげ出す。

(同右)

高倉院の寵愛を受けた以上は、隆房との対面を拒否する小督の姿が描かれている。高倉院に対して後ろめたい行動を一切慎み、故に隆房の文に対して「返事もせばやと思はれ」ながらも情けをかける事をせず、断じて拒否し上童に文を投げ返させる冷淡な態度をとつたのである。この行為も全ては高倉院に仕える身となつたからであり、自らの立場が変化した以上、その環境に応じた態度を一貫して守ろうとする強い姿勢が窺い知れる。隆房に対する小督の徹底した態度は延慶本にも以下のように記される。

小督局、「吾内裏ニ被召テ参ナム後、争御後グラク、カ、ラムフシヲ見ルベキ」ト、心ツヨク思ナシテ、忿取、ツボノ内ヘソ投出シ給ケル。

(延慶本第三本「小督局内裏へ被召事」)

覺一本とはほぼ同様の内容で延慶本もまた、内裏に召された自らの立場を自覚し、隆房に対して冷たい態度をとる小督の固い決意を記している。一方、長門本には小督が隆房に対して無視を決めこみ、手紙を投げ返すなどの徹底した言

動は一切描かれていない。そもそも、長門本には小督と隆房が心通わせた恋人関係であったという記述さえ無いのである。覚一本、延慶本はともに高倉院に出仕する以前の、小督と隆房の関係を物語前半に描いており、当初は隆房の想いを受け入れなかった小督が、長期に渡り幾たびも贈られてくる隆房の歌や文に、「なびく気色もなかりしが、さすがなさけによはる心にや、遂にはなびきたまひけり」（覚一本）、「多ノ年月ヲ送り、数ノ歌ヲヨミ尽シナドシケレバ、情ニヨワル習ニテ、終ニハナビキニケリトゾ聞ヘシ」（延慶本）など、最終的には隆房の想いを受け入れた事が読み取れる。しかし長門本においては、隆房が小督に想いを寄せる描写はあるものの、小督が隆房に靡いたという記述は一切ないのである。隆房が「人しれす、おもひのやまふとなりて、ひまなく御ふみ、かよはしけれども、き、も入給はす」（長門本巻第十二「小督局事」）と小督の態度は一度も隆房に傾かないまま、高倉院に召される事となる。いわば、長門本は隆房の一方的な求愛のみで、小督は最初から隆房の想いを受け入れる事すら無かった設定なのである。故に相手の強い想いに押され、いつしかその想いを受け止めるという情け深さを、長門本の小督から感じる事は困難に思える。覚一本や延慶本の小督が、出仕後に見せた隆房への一貫した態度以前に、隆房を受け入れる事さえなかった長門本の小督には、一層堅固な屈することのない精神を感じるのである。

次に、(B)の場面である。中宮徳子と隆房の妻、二人の娘婿を奪った小督を捕らえ、尼になせと激怒する清盛を知った小督が、誰にも告げず宮中を退出する場面である。まず、覚一本の小督は「我身の事はいかでもありません、君の御ため御心ぐるし」と小督自身に危害が及ぶ心配よりも、高倉院への影響を氣遣う小督の思いが語られ、誰にも行方を知らせる事なく内裏を出奔する。一方、延慶本は「小督局是ヲ聞テ、忽ニ身ヲ徒ニナサム事無由トテ」、また長門本は「まことに、この人のこゝろにては、さしをかせたまはし。こゝにて、はちをさらし、人手にかゝらむよりは」と、清盛の怒りに不安を抱き、我が身に迫る危険を回避するため、宮中を退出する様子が見受けられる。この退

出場面における小督の心中をそれぞれ比較した時、唯一高倉院を思案しているのが、覚一本の小督のみである。高倉院に仕えて後は、誤解を招く言動を一切拒絶し、そして清盛に睨まれたと知ってからは、自身の身を案じるよりも高倉院に及ぶ影響に心苦しみ、自ら宮中を去って行く。高倉院に従順な小督像が一層明瞭化し、控えめでおとなしい印象を与えるであろう。そして、この場面で清盛について言及する小督を描くのが長門本である。小督自身が「まことに、この人のこゝろにては、さしをかせたまはし」と、一度敵視した相手を徹底的に追い詰め、痛めつける清盛の危険性を多分に感じ、実際に捕えられるのも時間の問題だと危惧する様子が見受けられる。長門本の小督は、まず何よりも清盛の小督に対する怒りを畏怖しており、追っ手から逃れ、我が身を守るために宮中を退出した様子が描かれている。

## (二)

次に、(C)の場面である。失踪した小督を捜し出すため、高倉院は臣下の仲国に小督の居場所を見付け出すよう命令を下す。仲国が小督を捜し求める場面は、名月の嵯峨野を舞台に、小督が奏でる琴の調べによって発見されるという、物語の中で最も佳境の場面である。「をしか鳴此山里と詠じけん、嵯峨のあたりの秋のころ」、「峰の嵐か松風か、たづぬる人のことの音か」(覚一本)などの、哀切感漂う美しい表現などが彩りを添え、王朝物語的な雰囲気のある場面である。仲国に見つけ出された小督はその心中を告白するが、この箇所は物語中最も長く小督の思いが語られる場面である。

・それにも聞かせ給ひつらん、入道相国のあまりにおそろしき事をのみ申と聞きしかば、あさましさに、内裏をば<sup>①</sup>

にげ出て、此程はかゝるすまゐなれば、琴などひく事もなかりつれども、さてもあるべきならねば、あすより大原のおくに思ひ立つ事のさぶらへば、あるじの女房の、こよひばかりの名残をおしうで、「今は夜もふけぬ。立ち聞く人もあらじ」などす、むれば、さぞなむかしの名残もさすがゆかしくて、手なれし琴をひくほどに、やすうも聞き出されけりな

( 覚一本巻第六「小督」 )

始ヨリ申タカリツレドモ、世中ノウラメシサ、身程ノハツカシサニ、カクトモ申サヅリツレドモ、強ニ恨給ヘバ、難去加様ニ申也。世ニ隠ナキ事ナレバ、定テソレニモ聞給ケム、入道ノ方サマニ、安カラヌ事ニシテ、召出テ可被失ナムド聞ヘシカバ、心憂悲テ、ゲニモサ様ノ事アラバ、乍生恥ヲ見ムモウタテクテ、君ニモシラレマヒラセズ、人独ニモ不被知シテ、内裏ヲ迷出候シ時ハ、イカナラム淵川ニ身ヲナゲテ、此世ニナキ者ト人ニ被知ムトコソ思シカドモ、人ニ申合セシカバ、「淵川ニ入テ死ヌル者ハ、吾身ヲ害スル咎ニヨリ、惡道ニ落ル」ナムド申シ、事ノ怖サニ、今マデ思煩テ、水ノ底ニモ不沈、ツレナクカクテ候ヘバ、定テ君ハ、隆房ニ心ヲ通シテ、被隠サタル歟ナドモヤ思召候ラムト、ハツカシクコソ候ツレ。但是ニカクテ有ム事モ、只宵計也。明ナバ大原ノ奥ニ尋入、今ハ思立事ノ有ツレバ、日来ハ等ニ手懸ル事モナカリツレドモ、宵計ノ名残也、夜モフケヌレバ、誰カハ聞モトガムベキト、憚ル心モ無シテ、箏ヲ彈ツル程ニ、被聞出ニケリ

( 延慶本第三本「小督局内裏へ被召事」 )

①「君の御気色は、かたしけなければと、入道のおそれあり。②なにとなくまよひ出しかは、いかなるものにか、心をかよはすらんと、おほしめすらんもあさまし。この世いく程ならず。出家して後生をねかはん」とて、既に戒の師を請て、御くしをすまし、けさ、ころも、ようゐして、た、いま、かみをそらんとし給けるか、③今生にて、心にかゝる事あらは、後世のさはりともなりなんすとして、朝夕手なれ給たりける琴をとり寄て、さいこのかくと

おほしめして、ひかせ給けるおりふしに、このたかかねまいりたり。

(中略)「<sup>①</sup>我はこれにあり。世の中物うく、はちかましき事あるへしときこえしかは、おそろしさのまゝ、まよ

ひ出たり。<sup>⑤</sup>なんち、いかにしてたつねきたりたるぞ。夢とこそおもほゆれ。まことに君の御事、わすれまいらせ

ねは、あらはれて、なんちにあひたる事こそふしきなれ。このよし、もらし奏聞せよ。我はこよひはかりこそ、

これにあらんする。<sup>②</sup>あけなは、大原のおくに、おもひたつ事あり」  
(長門本卷第十二「小督局事」)

長門本の「たかかね」とは「高兼」であり、他の諸本が記す高倉院に下命を受けた臣下仲国の名は、長門本のみ高兼としてゐる。覚一本は彈正少弼仲国、延慶本は藏人仲国とする。さて、右記の(C)の内容を以下のように四つの事項に分け、それぞれ該当する諸本をかつこ内に記した。

① 清盛の恐れ故に宮中を退出したこと。

(覚一本、延慶本、長門本)

② 明日、大原に立出する名残りに琴を演奏したこと。

(覚一本、延慶本、長門本)

③ このまま身を潜めていることで、別の男性への心変わりを、高倉院に誤解される懸念を抱いていること。

(延慶本 (別の男性を隆房と限定)、長門本)

④ 一時は入水自殺を考えたが、しかし悪道を厭い断念したこと。

(延慶本)

⑤ 高倉院を忘れる事が出来ぬ思いと、高兼に会えた事の不思議。

(長門本)

まず、長門本のみが記す<sup>⑤</sup>では、小督を発見した高兼との出会いに、「夢とこそおもほゆれ」と、小督の興奮が伝わってくる言葉がある。もちろん、清盛に見付からぬよう隠れ忍んでいるのだから、居場所が露見してしまった事は、小督にとって有益でないことは言うまでもない。だが、それ以上に「まことに君の御事、わすれまいらせねは、あらはれて、なんちにあひたる事こそふしきなれ。このよし、もらし奏聞せよ」と、高倉院に小督の想いを申し上げ

るよう高兼に指示する。覺一本、延慶本が身を潜める状況でありながら、琴の演奏を聞かれましたと、僅かな後悔を感じさせるのに対し、長門本の小督は溢れる高倉院への想いを高兼に伝え、さらに高倉院にも小督の想いを奏上するよう頼むのである。人目を避け、隠れ忍ぶ身であるにもかかわらず、恐れや困惑以上に高倉院に対する率直な想いを、包み隠すことのない小督の姿がうかがえる。

次に③、④を確認する。④は延慶本のための記述であるが、実は延慶本にはもう一つ右には挙げていないが、小督を訪ねてきた仲国に対して、清盛の追っ手ではないかと、小督が疑う場面がある。「内裏ヨリノ御使」と、小督の所在を訪ねる者がある事を知らされた小督は、「ヨモ内カラノ御使ニハアラジ。平家ノ知テ人ヲ遣シタルゴサムメレ」と、仲国を平家の使者ではと疑うのである。もちろん、小督は清盛の追っ手であると疑念を抱き、恐れているのであろう。黙って宮中を退出した自分を、高倉院が探し求めていようななどは考えも及ばず、逆に追い求める人物は、小督を捕えようとする清盛だとしか考えられない、清盛に対する消える事のない恐れが感じられる。仲国の訪問を、平家の手先だと疑う小督の姿は他では描かれておらず、延慶本独自の記事である。その点においても延慶本の仲国訪問の場面は、清盛の威力、脅威と、さらに清盛に怯え続ける小督の姿が強調される。その権力者清盛に睨まれた辛さと、そして高倉院のもとを離れた不安が、④のように小督に入水自殺をも思わせたのであろう。高倉院に強い愛情を注いでもらいながら、唐突に姿を消すのは裏切り行為のようなものである。決して高倉院に背いた失踪ではないが、そのように誤解されても、やむを得ない退出であった。清盛に憎まれる生き辛さと、一人きりになり支えを失った孤独感が、小督を死の思いに導いたのであろうが、加えて、高倉院を裏切ったような罪悪感も含まれているのではなからうか。高倉院に対して、理由はどうかあれ、黙って出奔するという無礼を働き、それは同時に小督と高倉院の関係からして、恋人を一人置き去りにしたということである。そのような酷い態度をとりながら、平然と生き延びていられ

ようかという、小督の思いが推し量れるようである。だからこそ、「ツレナクカクテ候へバ、定テ君ハ、隆房二心ヲ通シテ、被隠サタル歟ナドモヤ思召候ラムト、ハヅカシコソ候ツレ」というように、③の想像に繋がってしまうのではないだろうか。黙って宮中を後にした小督が何処かで隠れ住んでいると、高倉院が耳にした時、如何に思うだろうかと不安に駆られたのであろう。その思いは、高倉院があらぬ誤解を抱くのではないかと、隆房への心交わりを疑われる心配となっていく。今さら、小督自ら隆房の事を思い出し、普段では考えにも及ばない不安を様々に思い巡らせてしまうのは、高倉院に対する罪深さを思い詰める過程で、小督にとつて最も悪い状況を想像してしまう悲観が多分に読み取れる。清盛への恐怖と高倉院に対する罪の意識、憂き目を逃れるため、死まで考えるほどに窮した切迫感が小督の苦痛さ、苦悩さをより強く印象づける。

そして、最後に三本の諸本全てに共通する事情が①、②である。①から⑤を通して見たとき明らかな点は、先述した小督の語りの中で最も内容が簡潔であり、希薄なのが覚一本だという事であろう。小督の胸中も僅かな語りのみで、清盛に抱く恐怖の念と、大原に向かう告白のみであり、その後続く琴を奏でる経緯などは延慶本、長門本にも共通する内容である。覚一本は他の諸本に無い独自の記事を持たず、心の動揺や感情的な心中思惟が極めて少ないことから、自身の苦難や危惧さえほとんど語らない小督の姿に、消極的な印象さえ受けるようである。清盛に対する畏怖や高倉院に対する名残惜しさも、他の諸本と比べ詳細な語りとは言えず、小督自身の主張や、その激しく揺れる心の内面が見受けられないのである。多くの心情を語る延慶本や長門本の小督は、覚一本に比べ、より写實的に小督の心中を捉え、人間的な面での造型がなされており、小督の内面を深く窺い知る手がかりになっていると考えられる。

## (三)

最後に、小督が高倉院の元へ召し帰されたと知り、清盛が押し寄せてくる物語終盤の最も緊迫した(D)の場面に  
ついて考察を行う。ここではまず覚一本と延慶本の該当箇所を以下に並べる。

・小督殿、出家はもとよりののぞみなりけれども、心ならず尼になされて、年廿三、こき墨染にやつれはてて、嵯峨のへんにぞ住まれける。  
(覚一本巻第六「小督」)

・小督局心ナラズ尼ニナサレテ、口惜トモ云計ナシ。「哀、嵯峨ニテ思立タリシ時、大原ノ奥ヘモ尋入テ、吾ト様ヲモカヘタラバ、心ニク、テ可有ニ、無由モ再被召帰テ、恥ヲ見ツル悲シサヨ」ト歎給ヘドモ、甲斐モナシ。ヲシカラヌ命ナレバ、水ノ底ニモ入ナムト思立給ヘドモ、サキニモ人ノ云シ様ニ惡道ニ墮ム事、心憂ク覚ユレバ、「今生ハカリノ事、一旦ノ恥モナニナラズ。後生ハ終ノ栖ナレバ、浄土ヲコソ願ハメ」トテ、終大原ノ奥ニ分入テ、柴ノ庵ヲ結び、一向念仏シ給ケリ。露モ忘ル事ナク明シ暮シ給シガ、齡八十二テ、日来ノ念仏ノ功積リ、臨終正念ニテ、往生ノ素懷ヲ遂給フ。  
(延慶本第三本「小督局内裏へ被召事」)

一見して分かるように、この小督説話の最終局面を迎える重要な場面において、覚一本は僅かにしか小督に触れていないのである。「出家はもとよりののぞみなりけれども、心ならず尼になされて」と、語り手の言葉があるので、清盛の仕打ちに対し、小督が如何なる処置をし、思いを巡らせたのか何も語られる事なく物語を終えている。あまりに淡々とした短い描写であり、(C)の箇所と同様に、小督の心中を具体的に知る術がないまま、何も語る事なく小督説話は終幕するのである。一方、延慶本の小督は、「無由モ再被召帰テ、恥ヲ見ツル悲シサヨ」と、宮中に戻った

がための悲運に嘆き、さらに「ヲシカラヌ命ナレバ、水ノ底ニモ入ナムト思立給ヘドモ、サキニモ人ノ云シ様ニ惡道ニ墮ム事、心憂ク覺ユレバ」と、再び死の思いに駆られるのである。嵯峨野にてそのまま出家をしていれば、遭うことも無かつた清盛の非情な振る舞いによつて、恥をかかされた悔しさと後悔が伝わってくる言葉である。清盛に抗う事こそしなかつたが、このような運命に陥つた口惜しさと、無念の思いを延慶本の小督から確かに感じる事が出来るであらう。ではここで、長門本の該當箇所を取り上げてみる。長門本の小督追放の場面は、以下のように長門本独自の記述がなされている。

大政入道、き、つけていかりをなし、ふくはらよりはせのほり、小河のつほねのおはする亭に、やふり入て、たけなるかみを、入道、手にからまきて、つほのうちへひきいたして、見られければ、「誠に、きみのおほしめさる、も、ことはりなり。天下第一の美人にてありけるものを」とて、よになつかしけにおもはれたり。あまつさへ、み、にさしよりて、「入道にちかつきたまへ。いまのなんを、たすけたてまつらん」ときこえければ、小河殿、「日月いまた天にまします。玉体にちかつきまいらせなから、いかてかさる事は候へき。貞女は両夫にまみえさることはしらせ給へるか」と、いさ、かも、ゆるけなきよしにの給ければ、入道はらをたて、もとよりの意趣なりければ、「ふしきのふるまひをせらる、こそ、きくはいなれ。入道か帰聞事といひ、また女院のおほしめさる、処を、いかておもはさるへき」との給て、かみを切、あまになし、み、をきり、はなをそきて、をひはなつ。

(長門本卷第十二「小督局事」)

延慶本では、「大床アラ、カニフムデ参ル」清盛に、「立去方モ無シテ、キヌ引カツギテフサレタ」るばかりの、か弱い小督の姿が描かれるが、それとは対照的な長門本の小督像が浮かび上がるようである。多田圭子氏は、長門本のこの独自の記事を、「〔清盛对小督〕という対立の図式の頂点に位置する場面」、また、「〔清盛对小督〕の対立の図式に

基づく著しい脚色が施され、両者対峙する劇的場面が形成されている」と、長門本小督説話における清盛、小督の關係性を指摘されている。<sup>(8)</sup> 彼の諸本が描かない、清盛の好色的な言動を顕にし、それに対抗する小督の毅然とした強靱な態度が描かれる場面である。「貞女は両夫にまみえざる」という文言は『平家物語』では、戦死した夫を追い、入水自殺した小宰相物語にも確認でき、小谷野藤寿氏は「王朝風的な女性」であり、横暴な清盛に対して決然と意思表明し「儒教論理的な自覚を持った女性である」との小督像を指摘した。<sup>(9)</sup> ここで見られる、清盛の小督に対する「かみを切、あまになし、み、をきり、はなをそきて、をひはなつ」という、卑劣かつ残酷な仕打ちは既に指摘されるように、『曾我物語』巻五「けわひざかの遊君が事付賢人二君につかへず貞女両夫にまみえざる事」において、臣下の妻を恋慕した王が、その夫の「耳鼻をそぎ口をさき」淵に沈めて靡かぬ妻を略奪しようとしたが、妻は王を欺き、自ら同じ淵に身を投じたという貞女説話がある。<sup>(10)</sup> また、『源平盛衰記』卷第三十八「重國花方院宣を帶して西國下向同上洛返狀を奉る事」に、後白河法皇の院宣を御壺召次の花方に与えて平大納言時忠に渡させたところ、時忠は怒り花方を捕らえ、「髻を切り鼻を鍛で」追放したという記述がある。<sup>(11)</sup> 鼻をそぐ行為は、中国古代の五刑の一つであり、罪人の鼻の頭を切り落とす刑罰である。また鎌倉時代、地頭の不当な行為を訴えた阿豆川莊百姓申状には、逃亡百姓の田畑の耕作を強制させ、これに従わない者の妻子を、「ミミヲキリ、ハナヲキリ、カミヲキリテ」尼のようにし、縄で縛り痛めつけ追い責める非情な地頭の仕打ちが克明に訴えられている。<sup>(12)</sup> 権力者に絶対的な服従をさせる手段として、また刑罰の一つである残酷な鼻そぎを、清盛は感情的に自らの手で小督に下し放逐するという、極めて異様な人倫に外れた行為をする。この行いに対して動じることなく、断じて拒否した小督の姿は、竟一本、延慶本にはない強靱な精神、決して服従しない凜然とした態度で挑む強さが窺われるのである。

## (四)

以上、これまでの考察をまとめてみると(一)で先述した、渥美かをる氏と池田誠氏の見解にあるように、覚一本における小督の内面描写の乏しさは、本稿で取り上げた四箇所場面にも通ずる事が立証された。特に(C)と(D)の場面においては、延慶本、長門本が小督の語り、言動を独自の記事をもつて委細に描くところを、覚一本では端的に、目立った特徴を与えないまま物語を進行させている。故に、覚一本小督の個性が延慶本、長門本に比べ希薄であるように感じる。(C)の場面においては、物語中、最も長く小督が自らの思いを伝える箇所であり、読者も知り得なかった小督の苦悩を語らせる事が出来る唯一の場面である。しかしながら、やはり覚一本の小督は何も語らない。清盛の恐怖と高倉院の恩愛との狭間で、小督の人生は翻弄され、自己の意思を主張せぬままに悲運を辿る姿は、語らぬという効果により、不敏さと悲哀が一層増すはかなげな小督像を印象付けるようである。

そして、小督の人物像造型という点で、最も小督の個性が明瞭化されているのは長門本であろう。それは(D)の場面に特に顕著に表れている。清盛对小督という敵対関係をもって、清盛の残忍さを強調し明確化させる事で、他の諸本では窺い知れない小督の徹底した意思表示、信念を崩さぬ強固な精神が読み取れるであろう。覚一本とは最も対照的な小督像であり、また、この長門本の小督の姿は、既に(A)の箇所からも読み取れるのではなからうか。

(A)の場面では覚一本、延慶本ともに高倉院に仕えた後、隆房に対して手紙さえも拒絶する小督の態度が描かれるが、高倉院に仕える以前、隆房と恋人関係になった経緯は既に述べたように、長期に渡る隆房の求愛に、当初はその気が無かった小督が次第に傾いていったからである。しかし、長門本は小督が隆房に靡いたなどとは一切記しておら

ず、隆房の想いを小督が受け入れる事は無かったのである。長門本の小督は、一貫して拒否の態度を隆房にも見せており、小督説話の始まりから、毅然とした不動の精神を持つ小督像の雰囲気を感じさせていたのである。

延慶本においては、これまで確認してきたように（C）、（D）の場面における小督の告白は覚一本よりも多様な内容盛り込み、特に高倉院に隆房への心変わりを疑心される不安などは、独自の記述である。しかし長門本のように、清盛が振り翳す横暴な態度に對して、決然と対応するという小督像ともまた違った面が見られ、延慶本の小督はどちらかと言うと覚一本の小督像に近似しているように思える。先述した事であるが、物語終盤の（D）の場面では、荒々しく押しかけてきた清盛に對して、「立去方モ無シテ、キヌ引カツギテフサレタ」る事しか出来ない小督の無力さが伝わり、なす術のない非力でか弱い小督像は、覚一本と共通する点が多いようにも見受けられる。しかしながら、やはり心情を語るといふ点では、明らかに延慶本の小督の方にその胸中の告白内容が多く、特に（D）の場面における宮中に帰り戻ってしまった後悔や、清盛によつて厄にされた屈辱感など、寡黙な覚一本の小督に比べ、不幸な我が身を悲嘆し悲憤する痛ましい姿が感じ取れるのである。最後に、覚一本、延慶本、長門本が高倉院追悼逸話の最終章として小督説話を置く事は、前にも述べた通りである。古態の屋代本が重盛没後の、清盛の悪逆譚として設けた章段を移動させ、高倉院関連説話と置いたのである。しかしながら、純粹に高倉院と小督の悲恋を主題に置き、清盛の悪行譚として位置付けなかったのは、覚一本のみである。延慶本は物語中に、「小松内府御坐バ、カ、ル御事ハアラマシヤナムド、天下ノ人々今更歎アワレケリ」と記し、長門本は小督説話の冒頭に、「小松大臣、うせ給てのち程なく、程をへたです、入道あくきやくを、きはめ給けり」と、両本ともに古態の屋代本にならつて、清盛の悪行を小督説話の主たるテーマの一つに捉えていた事が分かる。覚一本にはこのような記述は一切なく、小督と高倉院の別離は、確かに清盛の横暴が契機となつて齎された悲劇であるが、しかしそれは小督と高倉院の悲恋の原因として存在

しているものであり、清盛の専横を描くことに着目してはいないのである。高倉院追悼逸話の要素を含みながら、延慶本では清盛の乱暴な振る舞いに悲しみ歎く小督を描き、そして長門本では清盛と敵対する小督像を設定する事で、覚一本、延慶本、長門本の三本にそれぞれ異なる性質の小督像が誕生したのである。

注

(1) ○『玉葉』(治承元年十一月四日条)「或人云、成範卿女、〔祇候内裏、年來通御云々〕此一兩日之間、有産事、皇子皇女之間、其說縦横、後聞皇女云々、」(一)内は割注

○『山槐記』(治承四年四月十二日条)「今日初斎院〔御年四歳、新院第一御女内親王也、母權中納言成範卿女、號小督殿、即新院女房也、生此宮之後不參、去年冬爲尼、生年廿三也、有子細歟、不知其由〕」(一)内は割注

○『本朝皇胤紹運錄』「坊門院〔範子内親王。斎院。號六角宮。又號土用宮。承元四四十二崩。三十四。母成範卿女〕」

○『女院小傳』「坊門院範子。土御門准母。高倉第一女。母中納言成範女。治承二六廿七爲内親王〔勅別當越前守藤雅隆〕。同日賀茂斎院。養和元正十四退下〔依高倉崩也〕。建久九三三爲皇后宮〔依准母也。二十二〕。建永元九二庚辰院號。卅。承元四四十二御事。卅四。」(一)内は割注

○『明月記』(元久二年閏七月廿一日条)「高倉院督殿宿所〔皇后宮御母儀〕。日来病悩被待時之由聞之。年來於此辺聞馴之人也。仍訪之。女房出逢。即飯宿所。」(一)内は割注

○『たまきはる』「山吹の匂ひ、青き単衣、葡萄染めの唐衣、白腰の裳着たる若き人の、額のかり、姿よそゐなど、人よりはことに花く」と見えしを、「いまだ見じ」とて、人に問ひしかば、小督の殿とぞ聞きし。この度より物言ひ初めて、局のそなたざまなれば、下るとても、具してなどありしが、そののち行方も知らで、廿余年ののち、嵯峨にて行き遭ひたりしこそあはれなりしか。」

○『延慶本平家物語』(「前略」終大原ノ奥二分入テ、柴ノ庵ヲ結び、一向念仏シ給ケリ。露モ怠ル事ナク明シ給シガ、齡八十二テ、日来ノ念仏ノ功積リ、臨終正念ニテ、往生ノ素懷ヲ遂給フ。」

『本朝皇胤紹運錄』、『女院小傳』に見られる坊門院範子が、『山槐記』において高倉院の第一皇女であり、またその母が

「權中納言成範卿女、號小督殿」と、小督であることが確認できる。範子を産んだ小督が治承三年の冬、尼となり出家した原因について「有子細歟、不知其由」と、「山槐記」は真因を不明と記す。そのため、小督の出家の背景に『平家物語』の小督説話が存在し、故に記述を残す事が困難であつたかと想像を誘うようである。上横手雅敬氏は、『平家物語の虚構と真実へ上』（塙書房 一九八五年十一月）において、小督説話の清盛の悪行を、そのまま真実と判断しかねるとし、しかし「山槐記」の記述について、「小督が、清盛や徳子に気がねして、自ら身をひき、世をはかんで出家したとする可能性は考えられる」との見解を述べている。また、「たまきはる」では、作者藤原俊成の娘建御前が、親しくしていた若き頃の人目をひく小督の美しさと、後に嵯峨にて隠遁生活を送る小督の姿に、「嵯峨にて行き遭ひたりしこそあはれなりしか」との言葉を残している。そして、『明月記』では、嵯峨にて藤原定家が病氣がちの小督の宿所を訪ねる記述があり、「山槐記」の記事に依ると、この時小督は四十九歳頃かと思われる。また、延慶本は独自の記事をもつて、小督が八十歳まで生きた事を記している。

(2) 中西美智子氏「平家物語成長変化の一段面——屋代本「小督」と他本との関係——」〔文学・語学〕第四号 一九五七年六月。

(3) 堀竹忠晃氏「平家物語・覚一本の成立(Ⅲ)——「小督」について——」〔日本私学教育研究所紀要〕第二十一号 一九八六年三月。

(4) 本文の引用は以下のテキストを使用し、私に適宜傍線を施した。

○覚一本…『新日本古典文学大系 平家物語』（岩波書店）。○延慶本…『延慶本平家物語』（勉誠社）。

○長門本…『長門本平家物語の総合研究 校注篇』（勉誠社）。○屋代本…『屋代本・高野本対照平家物語』（新典社）。

(5) 渥美かをる氏「平家物語の基礎的研究」（笠間書院 一九七八年七月）。

(6) 池田誠氏「覚一本「平家物語」の立場と表現——その心中思惟の扱いをめぐって——」〔文学と批評〕第五十二号 一九八五年八月。

(7) 長門本は「三条小河に、すみ給ければ、小河殿とそ申ける」と、「小督」の名を「小河」と記す。

(8) 多田圭子氏「長門本「平家物語」「小督」譚小考」〔長門本平家物語の総合研究 論究篇〕勉誠社 二〇〇〇年二月。

(9) 小谷野藤寿氏「平家物語「小督」について」〔昭和学院国語国文〕第八号 一九七五年八月。

- (10) 『曾我物語』上卷（穴山考道氏改訂 岩波書店 一九三九年十月）。
- (11) 『源平盛衰記上・下』（芸林社）。
- (12) 『大日本古文書 家わけ一ノ六』所収「高野山文書」建治元年「阿弓河庄上村百姓等言上狀」。
- (13) 注(5)、(6)に同じ。